

小説部門優秀賞

## 放課後の推し姫

盛岡第二高校3年 高宮花那

むかしむかし、あるところにお姫様がおりました。

お姫様は可愛いものが大好きで、お姫様の周りにはいつも可愛いもので溢れていました。

しかし周りの人々は、そんなお姫様を口々に馬鹿にし、笑いました。

自分には可愛い世界は似合わないのだと傷ついたお姫様は、綺麗な髪を短く切り、お気に入りのドレスも脱ぎ捨ててしまいました。それ以来、幸せに色付いていたお姫様の世界は灰をかぶってしまったように、暗い灰色に染まってしまったのです。

「渚ー！」

学校向かっている道中、野太い声に名前を呼ばれ渚は後ろを振り向く。すると、熊のような体格をした制服姿の男が自分に向かって突進してくるのが目に入った。

自分に飛びついてくる瞬間を見計らい、渚はさつと身を躲す。

「なんで避けるんだよ！」

「何度も言ってるでしょ。山木、毎朝僕に飛びついてくるのはやめてよ」

渚の言葉に、そうだそうだと同調する声が聞こえる。

「お前なんか飛びかかれたら、渚なんて簡単に折れちまうぞ」

いつの間にか渚の後ろに立っていた男は、山木の他に、もう一人の渚の親友だ。

「陸、おはよう」

挨拶を交わし、自分の横に並んだ二人とともに、再び学校と歩き始める。

いつもと同じ、渚の日常。

浜村渚は、どこにでもいるごく普通の男子高校生だ。親友の山木と陸と、平凡な毎日を送っている。代り映えのしない日常だけど、親友たちと過ごす時間は楽しいしそれなりに充実していると思う。

「今日の限あれだろ？ 稲村の授業」

「まじでだるい」

何気ない会話を繰り返しながら、渚たちはいつも通り学校向かう。すると、うなだれていた陸がはつと顔を上げた。

「でも今日あれじゃん。文化祭の話し合い」

二ヶ月後に開催される文化祭。それに向けた準備も段々と始まってきて、校内全体にウキウキとした空気が流れている。今日から、ホームルームで文化祭に向けてクラス企画の話し合いが始まるのだ。

「うちのクラスは、確かシンデレラの劇をやりたいて言ってたな」

山木がそう言うと、その横で陸が僕を見てにやりと笑った。

「渚、お前シンデレラ役やれば？」

陸の提案に、胸がドキリと音を立てる。  
「ガラスの女子も言ってたぞ。渚にシンデレラ  
やらせたら、絶対話題になるって」

渚可愛いもんな、と山木も納得したように  
うなずく。二人の様子に渚は頬が引き攣るの  
を感じた。

「…：嫌だよそんなの。罰ゲームじゃん」

努めて平然と答えると、二人は残念そうに  
声を漏らす。

「渚、絶対似合うのにな」

「下手すりゃ女子より可愛いぞ」

どうやら、自分の不自然な様子には気づか  
れていないらしい。安堵とともに昔の嫌な記  
憶が蘇ってきて、渚は静かにため息をつい  
た。

「ほあーっ、今日も疲れたな」

今日の最後の授業の終わりを知らせるチャ  
イムとともに、前の席の山木が渚の机に突っ  
伏してくる。

確かに今日は少し疲れたな、と思いつながら  
教科書を机にしまっていると、リュックを背  
負った陸が渚たちに近づいてきた。

「ほら山木、お前はこれから部活だろ」

柔道部とバスケット部にそれぞれ所属している  
山木と陸とは違い、渚は部活に所属していな  
い。

「じゃあな、渚」

手を振る二人を、渚は席に座ったまま見送

った。

しばらくすると、教室や廊下から人がいなくなり、辺りはしんと静まり返る。そのことを確認し、渚も席を立って廊下に出た。

下駄箱で靴を履き替え、外に出た渚は、校門とは反対方向に足を進める。吹奏楽部が奏でる音色や運動部の掛け声などに耳を傾けながら歩いていたら渚は、人気の無い校舎裏まで来ると、足を止めた。

渚が足を止めた先には、上続く黒ずんだ白鉄の階段がある。そのてっぺんには、手すりと同じく、薄汚れた扉があった。

渚は手すりに掴まり、階段を上っていく。それほど長い階段でもないのに、すぐに一番上の段まで上ることができた。そして渚は、目の前にある扉のドアノブに手をかける。ドアノブを回すと扉はあっけなく開き、渚は中に入った。

中に入ると、色褪せたカーテンの隙間から西日が差し込むだけの、薄暗く埃っぽい空間が広がり、机や棚には、ごちゃごちゃと物が散乱している。お世辞にも快適は言えない場所なのだが、渚は慣れたように荷物を床の隅に置いて、丸椅子に腰かけた。

ここは、数か月前に渚が偶然見つけた場所だ。

この部屋は、校舎内の理科室に隣接した理科準備室だ。しかし、校舎にあるもう一つの理科準備室

の方が使用されているため、ここには出入りする者は誰もいない。校舎内のドアには鍵をかけるられ、中からは入れないようになっていたので、生徒でこの部屋の存在を知っている人は渚以外にいないだろう。

渚も、この部屋の存在を全く知らなかったし気にも留めていなかったのだが、校舎裏にあるゴミ捨て場にゴミを捨てに来た時に、この部屋の裏口と、そこに続く階段を見つけたのだ。

階段の入り口には、立ち入り禁止の張り紙がしてあったのだが、文字が消えかけたそれに気付くことなく、興味を惹かれた渚は階段を上り、扉を開けて中に入った。

部屋の中は、一見殺伐として見えたが、中に入った途端、渚の胸はときめいた。

「ここ……」

机の上に散乱したビーカーやプラスチックが、宝石のようにキラキラと輝いて見える。部屋の中を舞う、日に透けた埃でさえ、渚の目には美しく見えた。

ここを甚く気に入った渚は、それ以来、放課後ここへ来て過ごすのが日課となった。

誰も知らないこの部屋で、一人でぼーっと落ち着くのが渚は好きだった。

ここは、渚のとおき『秘密の屋根裏部屋』なのだ。

ここに来るたびに、渚はまるで自分がおとぎ話の世界に入ったような気分になる。いつもはときめきを覚えるそれが、ふと、朝の会

話を思い出させて渚は憂鬱な気持ちになった。

陸たちに、シンデレラの話がされたこと自体は別に嫌ではない、むしろ興味があった。だが、興味があることを親友たちやクラスメイトに知られてはまずいのだ。

自分が普通の男の子とは違うことが、ばれてしまうから。

物心ついた時から、渚は可愛いものが好きだった。

ふわふわのテディベア、ピンク色のワンピース、母の口紅。どれも女の子が好むようなもの。

そして、中でも好きだったのはお姫様が出てくる絵本だった。

シンデレラ、白雪姫にいら姫。

ガラスの靴やドレスなど、可愛いものが散りばめられた世界。絵本を読んでいるときは、まるで夢の中にいるようだった。

可愛いものに囲まれた世界が、自分にとっての『普通』だった。だけどその『普通』は、他の子にとっては『普通』じゃなかった。

「お前、男のくせに女みたいで気持ち悪い」

小学生のとき、渚はクラスの子に目の前でそんなことを言われた。突然の事で思考が追い付かず戸惑いながら彼の顔を見ると、軽蔑の眼差しが自分を射抜いていた。男のくせに髪は長いし、女とばっか遊んでる

し」

その頃の渚は髪の毛が肩につくくらい長さがあり、よく女の子に間違われていた。また、休み時間に他の男の子たちのようにサッカーをして遊ぶよりも、女の子とごっこ遊びをするほうが好きだった。その何がいけないことなのか、渚には分からなかった。

「確かに、渚ってちよつと変だよな」

「普通じゃないよね」

にやにやとしながら、他の男子も自分の周りに集まってくる。教室のあちこちからも自分についてひそひそと話す声が聞こえてきた。

「俺、そうゆうのなんて言うか知ってる！」

男子の一人が、教室中に響き渡る声で言い放った。

その一言で、教室中にどつと笑いが起きる。渚は恥ずかしくて消えてしまいたくなった。男である自分が可愛いものを好きなのはこんなに笑われるくらいおかしいことだったのか。自分が普通ではないと知り、小学生の渚はものすごくショックを受けた。

あと少しで堪えきれず涙が零れてしまうと、あそこらで、担任の先生が教室に入ってきたのでその場は収まったが、次の日から渚はクラスメイトから距離を置かれるようになった。今まで一緒に遊んでいた女子たちの輪にも入れてもらえず、男子とも当然馴染むことができなかった。

その出来事を境に、渚は変わった。

他の男の子と同じように髪の毛をバツサリと切つて、身なりなども男らしくあるように心がけた。可愛いものが好きだと言う自分を押し殺して、『普通の男の子』を必死に演じた。自分を偽ることは辛かったけれど、そうすることとて中学では男の子の友達もできたし、山木と陸という親友もできた。

高校生になった今でも、渚は可愛いものを見ると心惹かれる。もしかしたら、自分は女の子になりたいのだろうかと考えた時期もあったが、そういうわけではなかった。自分は男として、可愛いものが好きなのだ。

こんな自分を山木と陸、自分と親しくしてくれているクラスメイト達に知られたら、きっと軽蔑されてしまうだろう。苦労の末、この平穏な日常を手に入れたのだ。それを壊してまで本来の自分をさらけ出す勇氣は、渚にはなかった。

過去のトラウマを思い出すと、今でも涙が出そうになる。目頭がじんわりとかすかに熱くなるのを感じて、渚は目元を乱暴に擦つた。

決して泣くまいと必死になっていた渚は、教室に響く足音には気が付かなかった。

「嘘」

頭上から降ってきた声に、渚は弾かれたように顔を上げた。

目が合つて、渚はそのまま固まる。渚の目の前には、知らない女の子が立っていた。その女の子があまりに綺麗で、渚は思



わず息を呑む。  
 ふわふわとした色素の薄い長い髪、長いまつ毛に縁取られた宝石のような瞳、陶器のようになつた白な肌。まるで、渚が大好きな絵本に出てくるお姫様のようにだつた。  
 目の前の女の子も、渚を見て驚いたように一瞬固まる。そして、目を見開いて渚を指さした。

「浜村渚くん!!」

面識がないのになぜこの子は自分の事を知っているのか。不思議に思っていると、女の子はぐいっと渚に顔を近づけてきた。

「本物だあ、可愛い……」

思考が追いつかぬまま、渚は女の子にキラキラとした目を向けられる。あまりに凝視されるものだから、渚はいたたまれない気持ちになつた。

「あの」

渚の小さな声に、女の子はハツとしてごめんなさい！と鼻がくつつきそうなほど近づけていた顔をものすごい勢いで後ろに引く。彼女の挙動がなんだか面白くて、渚は警戒心が少し解けるのを感じた。

「君は、誰？」

流れる沈黙に、渚は勇気を出して口を開く。女の子は恥ずかしそうに小さな声で答えた。

「私の名前は、高野風花。二年五組です……」  
 「えつと……よろしく、高野さん」

しどろもどろになりながら渚が挨拶をする  
 と、風花は頭を抱えて何やらつぶやき始め

る。

「せつかく渚くんに会えたのに！何やってんだ、私」

小声で言っているつもりだろうが、目の前にいる渚に風花のつぶやきは全て筒抜けだ。

「僕のことを知ってるの？」

渚がそう尋ねると、風花は信じられないというような顔をしてわなわたと口を震わせた。

「知ってるに決まってるでしょ！こんなに可愛い子知らないほうがおかしい！」

ものすごい風花の剣幕に、渚は思わず後ずさる。渚の様子を見て、風花は我に返りまた頭を抱えた。

風花の整った顔立ちから、大人っぽい子なのだろうかという印象を渚は勝手に抱いていたが、どうやらそうでもないらしい。

「……ふははっ」

出会ってからずっと一人で百面相をしている風花が面白くて、渚はついに堪えきれず笑ってしまった。

「今、笑った！可愛すぎるんですけど」

そんな渚を見て、風花は顔を真っ赤にして悶えた。

「……推し？」

渚が困惑しながら聞き返すと風花は力強くうなずいた。

「私にとって、渚くんは『推し』というとても尊い存在なの。高校に入学して初めて君を見たとき

き、心臓ぶち抜かれたよ」

聞けば、風花は初めて渚を見たとき、その可愛さに衝撃が走ったらしい。直接関わる機会はなかったが、「推し活」と称し今までずっと渚のことを陰ながら追いかけていたという。

まさか自分にそんなアイドルのファンみたいな人がいたとは、と内心引き気味の渚をよそに、風花は渚の可愛さについて熱弁している。

さつきまで推しである渚を目の前にしてまともに会話もできなかつた風花は、渚の魅力を語ることで色々と吹っ切れたらしく、バズーカのように喋り続ける。

「渚くんは……って、そういえば！」

一通り自分の事を話し終えた風花は何かを思い出したように、ハツとして渚の顔を見た。

「渚くん、さつき泣いてたよね？」

ぎくりと渚の体がこわばる。どうやら、泣きそうになつていたところを風花に見られていたらしい。

「……泣いてないよ」

目を泳がせながら渚は否定する。実際、涙は出ていない。泣きそうになつていたのは事実だが。

「嘘だよ、あんなに目擦ってたくせに！」

風花はそう言つて心配そうに渚の顔を覗き込んできた。ほら、目ちよつと赤くなつてるもん。せつか

く可愛い顔してるのに、目を擦りすぎると瞼たるんじやうよ」

可愛い。さつきから風花は渚に対して何度もそう言っていた。

「僕のこと、可愛いって思うの？」

渚の言葉に風花が熱弁モードに入りかけたので、渚は慌ててそれを制す。風花のマシガントークなら、さつきも聞いた。

「僕が可愛いものが好きって言ったら、高野さんは引く？」

気づけばそう口にしてしまっていて、渚がハツとして顔を上げると風花がいぶかしげな表情をしていた。

「いや、今のは」

「可愛いものって、例えば？」

慌てて否定しようとする渚の言葉を遮り、風花は首をかしげる。

「え？」

「可愛いものって、色々あるでしょ？ 渚くんはどうゆうのが好きなの」

予想外の言葉に、渚は戸惑う。風花の言う通り、可愛いという言葉は世の中の多くのものに当てはまる。自分は女の子が好むようなものに興味があるのだと、言ったら風花はどんな反応をするのだろうか。

ちらりと渚が風花の様子を伺うと、風花は渚のことをじつと見つめている。その視線に耐え切れなくなり、渚は口を開いた。

「ぬいぐるみとか、ワンピースとか……お姫様とか」

最後の一言を言い終わると、渚はうつむく。

なんでさつき会ったばかりの人に、こんなこと言ってしまったんだろう。自分みたいな男がそんなものを好きだなんておかしいに決まっている。

『気持ち悪い』

小学生のとき投げかけられた言葉が、渚の頭の中で木霊す。目の前の風花からも、同じ言葉を言われてしまうかもしれない。渚の視界に写る自分の足元が、ジワリとにじんだ。『…何それ』

風花の声に、びくりと渚の体が揺れる。次の瞬間、思いつきり肩をつかまれて渚は驚いて顔を上げた。

「そうゆうの、すっごく渚くんに似合うじゃん！ 渚くんの世界にピッタリだよ」

可愛すぎるんだけど！と悶える風花を見たまま、渚は固まる。

「気持ち悪いとか、思わないの？」

渚の言葉に、風花はなんで？と首をかしげる。

「だって、僕男だし」

うつむいて渚がそう言うと、風花は意味が分からないというように顔をしかめた。

「別に性別とか関係なくない？ 誰が何を好きだっけじゃないんだから」

風花の言葉が真っ直ぐに渚の胸に刺さり、溶けていく。

「そういえば……。この部屋の渚くんにぴった  
りだよね。ちよつと前に、偶然この部屋を見  
つけたんだけど、シンデレラに出てくる屋根  
裏部屋みたいで、すごく素敵で。お姫様みたい  
な渚くん、すごく似合うと思ったの」  
屈託のない笑顔でそう言う風花に、今まで  
渚が溜め込んでいたものが決壊し、溢れ出て  
くる。

「渚くん、なんで泣いてるの！」

焦った風花がそう言って、渚は今自分が泣  
いていることに気が付いた。

さっきのようにそれを拭うことも堪えるこ  
ともせず、幼子のように渚は声を上げて泣い  
た。

初めて本当の自分を受け入れてもらえた気  
がして、たまらなく嬉しかった。涙が溢れて  
止まらなかった。

渚の頭に、小さな手がそつと置かれる。涙  
でぼやけた視界で、心配そうに渚を見つめる  
風花の姿をとらえた。

風花になら、話してみても良いかもしれな  
い。頭に置かれた手の温もりが、そう思わせ  
た。

渚は、風花に自分のことを打ち明けた。昔  
から可愛いものが好きだったこと、小学生の  
頃にからかわれた時から、自分の気持ちを押  
し殺してきたこと、本当の自分を人に知られ  
るのが怖いこと。いきなり話し始めたという  
のに、風花は渚が話し終わるまで、黙って耳  
を傾けてくれていた。

「渚くん」

渚が話し終わると、風花が渚の名前を呼ぶ。

風花は真っ直ぐに渚の顔を見据えていた。「今まで陰から渚くんのことを見てきたけど、渚くんは誰よりも可愛くて素敵な人だよ。もつと自分に自信を持っていいんだよ。他人の言うことなんか気にしないで、自分の好きなことを堂々と貫いていいんだよ」

優しさに溢れた風花の言葉に、渚はまた涙が零れ落ちそうになる。ずっと自分を縛り続けていたトラウマがすっと溶けていくようだった。

「渚くんが何を好きであつても、渚くんは渚くんだよ。山木くんも陸くんも渚くんに対する気持ちは変わらないと思う。親友なんだから、ちよつとくらいじゃ関係は壊れないよ」

「：高野さんって、山木と陸のことも知ってるんだね」

渚がそう言うと、風花は分かりやすく慌て始める。

「いや、あの、渚くんとお二人が一緒にいるのをよくお見掛けしてましたので」

今までタメ口で話していたのに、急に推しに対するファンの反応に戻ってしまった風花を見て、渚は思わず吹き出す。

「ありがとう、高野さん」

晴れ晴れとした表情でお礼を言う渚に、風花は照れたようにうなずいた。

「そろそろ、帰らないと」

窓の外を見ると、日が沈んで外がだいぶ薄暗くなっている。渚と風花は一緒に学校を出た。

「本当に、話聞いてくれてありがとう」

改めて渚がお礼を言うのと、風花は首を横に振る。

「推しの幸せが、私の幸せなので」

すっかり覚醒モードに戻ってしまった風花を見て、渚は苦笑する。

「僕達、これを機に友達にならない？」

渚がそう提案すると、は!と風花の声が周辺に響き渡った。

「な、何を仰っているのですか」

あれだけ色々話したのに、風花には渚と友達になろうという考えは一ミリもなかったようだ。

「だって僕、また高野さんと話したいし。友達になれば、陰ながら追っかけする必要もないじゃん」

今日、教室で知り合い、初めて本当の自分をさらけ出すことができたのだ。風花と友達になるしかない、というかもうすでに渚の中で風花は友達という位置づけなのだが、風花は激しく首を横に振る。

「私がこんな近い距離で渚くんといて、正気でいられると思う？」

さつき頭まで撫でてくれたじゃないか、と渚は内心想ったが風花があまりに頑ななので今日のところは諦めることにした。「じゃあ、また会ったときは僕と話してくれ



る？」

「……善処します」

風花の言葉に渚は嬉しそうに笑う。渚の心は、スツキリと晴れやかだった。

「渚くん、シンデレラ役をするというのは本当ですか？」

渚と風花が出会ってから一か月、今や渚と『屋根裏部屋』で過ごすことも当たり前になった。風花は、今日も教室に来るなり渚に詰め寄ってくる。

「相変わらず、情報が早いね」  
「てことは、本当なんだ！」

苦笑いの渚をよそに、風花は最高！と大喜びで飛び跳ねていた。クラスでシンデレラの配役を決める話し合いの際、渚はシンデレラ役に推薦された。周りの盛り上がり押しに押され、結果シンデレラ役を引き受けたのだが、意外とすんなりと渚が引き受けたことに山木と陸は困惑していた。「渚、この前あんなに嫌そうな顔してたじゃん」俺らとか周りが盛り上がってるからって無理しなくていいんだぞ」

放課後、心配そうな山木と陸に詰め寄せられたが渚は首を横に振る。

「僕がやりたいから、引き受けた。……お姫様とか、昔から好きなんだ」

今、二人はどんな顔をしてるのだろう。渚が怖くてうつむいていると、二人がため息をつくのが聞こえる。

「そうならそうと早く言えよ、無理して引き受けてるかと思つたじゃん」

それだけ？と拍子抜けして渚が顔を上げる  
と山木と陸は何事もないような普通の表情を  
している。

「男なのにこうゆうのが好きって、二人は変とか思わないの？」

渚がそう聞くと二人は、なんで？と首を傾げた。

「何が好きだろうと、渚は渚だろ」

「もしかしてお前、俺らに引かれるとか気にしてた感じ？」

引くわけないだろ、と山木に背中をバシツと叩かれる。叩かれたところがジンジンと痛む。痛みと嬉しさが混じって渚は涙が出そうだった。

「ていうか陸、お前も何ちやつかり王子役することになつてんだよ」

「俺は渚姫と舞台に花を咲かせるからな。山木は裏方、頑張ってくれ」

いつものように冗談を言い合う山木と陸を見て、渚は二人が親友で良かったと心の底から思った。

「渚くんがシンデレラとか、可愛いに決まってるし！ファンが増えちゃったらどうしようー！」

数日前の出来事を振り返る渚の横で、風花は興奮冷めやらぬ様子で一人で騒いでいる。  
「高野さんは、もちろん劇見に来てくれるよね」  
渚がからかうようにそういうと、首がもげ

そんな勢いで風花が首を縦に振る。  
 「渚担として、行かないなんて選択肢はないよ！」

「たん？」

聞き返した渚の声も耳に入らず、興奮している風花を、渚は微笑ましく見つめる。

「高野さんが見に来てくれれば、僕も頑張れそう」

まだ、本当の自分を見せるには勇気がいるけど。自分を受け入れてくれる風花や親友たちの存在があれば、きつと怖いものは何もない。渚の笑顔を見て、風花はトマトのように顔を真っ赤に染めた。

「無自覚でそういうこと言ってくるのはずるいよ……」

顔を覆う風花に渚は思い出したように口を開く。

「ねえ、いい加減僕のこと友達認定してくれただ？」

風花とは毎日のように『屋根裏』で一緒に過ごすまでの仲になったけれど、いまだに友達宣言はできていないままだ。風花は困ったように渚を見つめるが、そろそろ自分のことを友達だと認めてほしい渚も負けじと風花を見つめ返す。

「推し……兼、友達ね」

渚が推しであるというスタンスはどうしても曲げられないようだったが、風花の口からようやく友達という言葉が聞けたことで、渚は大満足だった。嬉しさが胸にこみあげてき

て、渚は微笑む。  
窓から差し込む日の光に照らされたその笑  
顔は、絵本に出てくるお姫様のようにとても  
可愛らしかった。